

# 二人の労働者とサッチャー首相

——マキューアンの『時間のなかの子供』——

武 藤 哲 郎

## 1. はじめに

イアン・マキューアン (Ian McEwan) の『時間のなかの子供』(*The Child in Time*, 1987) は、それまで彼が書いていた小説とはいろいろな意味で一線を画するものである。一番大きな違いは、それまで描き続けてきた八方塞の社会に一筋の「希望」の光を見つけ出そうとしたことであろう。娘を誘拐された父親スティーヴン・ルイス (Stephen Lewis) が精神的苦痛から立ち直り、小説の最後で妻のジュリー (Julie) から赤ん坊を取り上げるシーンからそれがわかる。

もう一つの違いは、マキューアンが新しい小説の形「ジャンル・ミクスチャー ('genre mixture')」を試みていることである。『時間のなかの子供』のテーマは子供を失った父親の心を描くことであり、その意味でこの小説は心理小説である。さらにマキューアンは荒廃して暗い近未来のイギリス社会を描いてこの小説を政治小説にもしている。彼を取り巻く世界を映し出すことによって、父親スティーヴンの心理をより豊かにそしてより深みのあるものにしている。

『時間のなかの子供』に「首相」('Prime Minister') が登場する。匿名で架空の人物という設定であるが、サッチャー首相であることは間違いない。マキューアンが彼女の政策あるいは人となりをどのように考えていたかは興味ある問題である。この小説には二人の労働者が出てくる。トラックの運転手と機関車の運転手である。この二人とのスティーヴンの出会いは、サッチャー首相とのそれと奇妙に対照的である。二人の労働者が「子供」を大切に思っていることが読み取れる。しかし、サッチャー首相はそうとは言えないのである。

## 2. 『時間のなかの子供』と「ジャンル・ミクスチャー」について

『時間のなかの子供』の冒頭は、スティーヴンがロンドンのホワイトホールで開かれる政府の委員会へ出かけるところから始まる。彼は建物の前にたむろしている「許可証を持った乞食たち」('licensed beggars') を見かける。乞食たちはバッジを付けて特定の場所で「物乞い」をすることを許されている。読者は現実のイギリスから遊離した少し異様な社会が描かれていることに気付く。スティーヴンは若い女の子に5ポンド紙幣を恵んでやるが、口汚い言葉で罵られる。彼らは施しを受けて感謝するどころか傲慢になり、働こうとする意欲さえ見せない。スティーヴンはこのような制度を導入した政府の政策が間違っていると考え、彼が出席しているのは首相肝いりの「児童養護委員会」の小委員会、主に児童の読み書きに関して報告書をまとめるのが仕事であった。スティーヴンは児童文学のベスト・セラー作家である。彼をこの委員会に推薦したのは、友人のチャールズ・ダーク (Charles Darke) で、彼は過去に出版業を営み、スティーヴンの処女小説『レモネード』を世に送り出す手助けをした。その後、マスコミやテレビ業界に進出し、今では政界で活躍し

大臣に登り詰めている。スティーヴンの委員会では、現行のアルファベットの代わりに音声を表記したアルファベット（‘phonetic alphabet’）を用いてはどうかという滑稽な議論が続いている。極端なのは、悪影響を及ぼすので7歳まで児童に読み書きを教えてならないと本気で議論されていることである。スティーヴンはさらに「教師は今や不人気になるのを恐れて、教育に甘くなっている」という世相を述べる。これはイギリスの社会や政治、そして教育が描かれている政治小説である。

退屈な議論に飽き飽きしたスティーヴンは一人物思いに耽る。読者はイギリスの社会から、スティーヴンの心の中へと入っていく。それはきまって2年半前に誘拐された娘のケート（Kate）のことである。土曜の朝、近くのスーパーマーケットに買い物に出かけ、レジで支払いを済ませているスティーヴンがほんの一瞬目を離したすきにケートは連れ去られてしまう。他の買い物客も手伝い、後から来た警察も協力して彼女を探す但結局は見つからなかった。彼は買い物袋を抱え、一人で妻の待つフラットへ帰る。共通の財産である娘を失ったスティーヴンと妻ジュリーの間に気持の「壁」ができてしまう。象徴的なのは、ジュリーが大学でバイオリンを教えるのを止めて一日中家に引きこもり悲しみに「対峙している」一方、スティーヴンはケートの写真を持ち歩いて一日中街を歩きまわり悲しみから「逃けている」ことである。朝彼が出かけるとき妻は寝室で火の気の無い暖炉の前に座っているが、彼が夜帰って部屋の灯りを点けると彼女は同じ場所に座ったままだったという描写があるが、これは娘を失った夫婦の癒されない感情を描いて見事である。これは政治小説ではなく、はっきりとした心理小説である。この小説を最初読者が読むと、マキューアンの意図が社会を描くことにあるのか、人の心を描くことにあるのか戸惑う。娘を誘拐された失意の父親が、同じ小説の中で政府の政策を議論するのはどことなく違和感がある。これは後の『愛の続き』（*Enduring Love*, 1997）で主人公が気球のロープを最初に離したのは自分でないと悩むかたわら、まるでアクション映画の主人公のように妻を人質に立てこもった精神異常の男を射殺するという違和感に似ている。デーヴィッド・マルコム（David Malcolm）は以下のように「ジャンル・ミクスチャー」の機能を説明している。

It is worth asking what the functions of such genre mixture might be. One answer is that genre mixture is simply a remarkably common feature of British fiction in the 1980 s and early 1990 s. On the other hand, it is reasonable to assume that such a textual feature does have some particular function or functions within a text. This is the case with *The Child in Time*. Genre mixture serves to create a vision of a rich and varied world, in which characters have to live as psychological-emotional, political, and intellectual beings and in which, as is suggested below, healing in one sphere gives hope of healing in another.<sup>1</sup>

我々が生きている日常世界は豊かで、変化に富んでいる。それと同じように、その中に住む人間も心と感情を持ち、政治に関心を持ち、「時」の概念に興味を持つ知的な生き物である。人間の心は一つの鏡で映し出すにはあまりにも多様である。それを取り巻く世界、つまり社会や政治というもう一つの鏡を用いることによって、人間の心はその織り重なった豊かで深みのある色合いを万華鏡のように映し出すことができるのである。これがジャンル・ミクスチャーの機能である。サッチャー女史との面会をはっきり断ることによって、精神的に自立したスティーヴンは、後にジュリーの赤ん坊を取り上げるためにドーヴァーへ向かう。つまり、人間は政治的な生き物であると同時に心理的な生き物であるから、「政治」の解決が「心」の解決の希望をもたらすのである。

### 3. タイトル「時間のなかの子供」の意味について

「時間のなかの子供」というタイトルは漠然としていて意味が取りづらい。「子供」というのは特定の子供を指すのだろうか。「時間のなかの…」というフレーズに入った場合、全体として何を意味するのだろうか。『時間のなかの子供』は1987年に出版されているが、舞台はその数年先のイギリスであることが次のことからわかる。まずイギリスではまだ制度化されていない「許可証を持った乞食たち」が登場してくること、さらに警官たちが「武装」していることから治安や秩序が現在よりも乱れていることが伺われる。地球温暖化もかなり進んで、夏は雨が降らず給水制限をしていて毎日強い日照りが続き、気温は40度近くにまで上がっている。そうかと思えば秋を通り越して急に冬になり、雨ばかりであちこちで洪水が起きている。オリンピックの開かれている年らしく、スティーヴンはテレビでアメリカとソ連の短距離選手の些細なケンカが、双方の国のコーチや監督を巻き込んだ騒乱に発展するのを見る。これは世界核戦争の危機にまで及ぶ。Mars-Jonesは*Venus Envy* (1990)の中で具体的に1996年と計算している。彼によれば、オリンピックが開かれている年だから1992年か1996年のどちらかになる。「20世紀最後の夏」という表現があり、「警察官のガンベルトの油と皮の臭い」とあって警察官が銃を携帯するには司法上時間がかかると考えて小説の舞台を1996年と特定したのである。<sup>2</sup>ともあれ、総じて小説の世界は暗い。このように、小説が近未来を舞台にしているところから「時間の移動」を考えるとタイトルの意味していることが見えてくる。スティーヴンは小学校のころに以下のような文章を暗記したことを思い出す。

Time present and time past  
Are both perhaps present in time future,  
And time future contained in time past.<sup>3</sup>

上の文章の意味は「時は絶えず変化して未来へと進んでいく」と「未来は過去に遡る」ということであろう。「子供」を誘拐されたケートと取ると「時間のなかの子供」は、誘拐されて2年半たった今ケートは成長し続けているという意味になる。現在生きているとすれば5歳半になっているケートをスティーヴンはいろいろと心の中で思い描く。成長したケートを思い描いては、彼女を忘れないように努めている。彼女を忘れない一つの「儀式」はクリスマスプレゼントを買うことである。娘がいなくてもかかわらず、彼は毎年おもちゃ屋にプレゼントを買いに行き、家でそれを包装する。こういった無意味な行為をすれば余計落胆することを彼は百も承知である。しかし、彼はやめられない。買ってきたウォークーキーに向かって「ハッピー・バースデー」を歌い、離れた部屋に置いたもう一つから流れる自分の機械的な声を聞いているスティーヴンはまさに孤独な存在である。案の定、その夜彼は今までになく落ち込み朝が来るまでソファで泣いていた。マキューアンはいつしかスティーヴンが常軌を逸していることを、語り手の視点を変えることによって読者にうまく伝えている。それは、首相主催の昼食会に向かう途中、彼がケートに似た女の子を見かける場面である。

There were five girls in the rope, a compacted line that rose and fell to the pulse of the chant. The first girl was closest to him. The thick fringe bobbed against her white forehead, her chin was raised, she had a dreamy appearance. He was looking at his daughter.<sup>4</sup>

「彼は娘を見ていた」とあるが、これは今まで語られていた第三人称の視点ではなく、スティーヴンの視点から語られていたことがこのエピソードの結末になって分かる。彼はケートを捜しに小学校の中に入り、彼女を見つけるがケートは彼のことを知らないと言う。スティーヴンはそのうち思い出すよと言うが、二人は校長室に連れて行かれる。このときまで、読者はスティーヴンが見かけた女の子はケートだと思っている。「彼は娘を見ていた」という表現があるからである。しかしその子は、実はケートではなくルースという9歳半の女の子で小学校の校長も生まれたときから知っている子供であった。スティーヴンはそれでもケートであることを頑なに主張するが、ルースが幼稚園に入学したときの学籍簿を見せられて部屋から追い出される。帰り際、校長はルースに、明らかにスティーヴンに聞こえるように「あの男がまた話しかけてきたらすぐ知らせるのだよ」と大きな声で言う。知らないうちに語りの視点をスティーヴンに移すことによってマキューアンはいつしか彼が常軌を逸した人間になっていることを読者に効果的に伝えている。

「子供」はチャールズの意味にも取れないことはない。彼はスティーヴンの友人でもあり、世話人でもある。彼が処女作『レモネード』の出版の手助けをしてから、家族ぐるみの付き合いになり、ジュリーと別居したスティーヴンの面倒を何かと妻のセルマ(Thelma)が見るようになった。チャールズが政界で活躍するようになってからも、スティーヴンは機会があれば彼の家に入出入りしていた。チャールズは出版業からマスコミ業界を経て政治の世界に進んできただけに類まれな才能と力量を持っていた。人を惹きつける力は抜群であった。「首相」にも目をかけられて大臣にまでのし上がっている。ところが、突然チャールズはその要職を辞して田舎のサフォークに妻と一緒に引きこもってしまう。ストレスが原因の精神病であった。これまでの激務と首相を喜ばせなければならぬという過大なプレッシャーが彼の緊張の糸を切ってしまったのであろう。スティーヴンはノイローゼとしか聞いていないし、妻のセルマも多くを語らないのでチャールズに会いにサフォークに出かける。セルマからチャールズは森の中にいると聞かれ、彼はうっそうとした森の中に分け入って行く。大きな木の近くに差し掛かると、その木の後ろから一人の少年が飛び出してきて、彼のことをじっと見つめた。半ズボンを穿き、シャツの袖をまくり上げ、膝小僧は擦りむけて血が滲んでいた。まるで写真で見た疎開先に向かう少年のようだった。スティーヴンは少年に声をかける。

‘Hullo,’ Stephen said in a friendly way as he went forward.

‘What are you up to?’

The boy steadied himself against the tree while he lifted a leg and scratched above his ankle with the tip of his scuffed shoe.

‘I dunno. Jus’ waiting.’

‘What for?’

‘For you, idiot’<sup>5</sup>

少年は驚いたことにチャールズであった。彼はスティーヴンを巨木の上に作った彼の「隠れ家」に案内する。ポケットからパチンコを取り出し、夕日に染まった空に向かって小石を思い切り飛ばしてみせる。山荘に帰ったチャールズは、夕食を取るとスティーヴンとろくに話もせずに疲れきって寝てしまう。チャールズの病気は心が子供に向かって退化していく精神病であった。ケートがスティーヴンの心の中で「時」とともに成長していくとは反対に、チャールズはだんだんと子供に退化して行くのであった。

スティーヴンはチャールズとの面会で彼に同情する代わりに、少なからず落胆した。この事に関

して、C. バーンズは「スティーヴンは自分が子供に退化する欲望と闘っていた。だから他人がそうなることを許せなかった」と述べている。<sup>6</sup> それゆえ彼は自殺を考えずに、アルコールに浸っていたのであろう。ウィスキーを飲みながら彼はテレビのトーク・ショーを見て「視聴者たちはいつ笑っていいかを教えられる幼児に過ぎない、彼は彼らを罰したかった、いきよいよく叩きたかった、折檻ではないが。どうして彼らはあんなに子供になれるのか」と述べている。

「子供」はさらにスティーヴンと解釈できる。彼は「時」を超えてまだ自分が生まれていない世界に入り込んで母親を見るのであった。それは彼が別居しているジュリーに会いに出かけたとき、途中で立ち寄った‘The Bell’という名のパブで起こる。彼はそのパブを見たとき、すでに過去に見た情景なのに気付く。パブの脇には見慣れた自転車が2台立てかけてあった。窓から中を覗くと二人の若いカップルがビールを挟んで話し込んでいた。男は熱心に女に話しかけていたが、女は気が乗らないのか黙ってそれを聞いていた。

He was looking into the eyes of the woman, and he knew who she was. She had glanced up in his direction. The man was talking, making an insistent point, while the woman continued to stair... Absurdly, he raised his hand and made an awkward gesture, something between a wave and a salute. There was no response from the young woman who he knew, beyond question, was his mother.<sup>7</sup>

これは「デジャヴュ」である。スティーヴンは「時」を超えて過去の世界に入り込み、母親を見るのである。この不思議な体験のあと、彼は記憶に引かかる自転車のことを両親に話すが、父親は憶えていないと頑なに言い張り、母親はそんな父親を見て何も言わなかった。小説の最後で、母親は自転車にまつわる過去の出来事を次のようにスティーヴンに語り始める。

母親のクレア (Claire) と父親のダグラス (Douglas) が初めて出会ったのは、彼女が働くデパートであった。壊れた時計の払い戻しをふとしたきっかけで手伝ったクレアは表で待っていたダグラスと恋におちいる。彼は空軍の制服を着ていたが戦闘機のパイロットではなく事務職の兵隊であった。占領されて間もないベルリンに彼が赴任する前に彼らは婚約する。彼がイギリスに戻ってきたら正式に結婚することになっていた。彼が休暇で戻ってきたとき、彼らは新しい自転車を買いピクニックに出かける。クレアは妊娠していることをダグラスに伝えるが、彼は何も答えず暗い顔をしている。彼にはベルリンに恋人が出来ていた。いつしか雨になり、風も出てきて彼らはあるパブに立ち寄る。そこが‘The Bell’であった。子供を中絶してダグラスと別れようと決心した彼女の心は惨めであった。ビールを挟んで、子供を生むには良い時期ではないというダグラスの話に半ば飽きていたクレアはパブの窓から中を覗いている子供に気付く。

It was during this speech that Claire, still just holding on, still distracted, glanced across the saloon bar towards the window by the door. ‘I can see it now as clearly as I can see you. There was a face at the window, the face of a child, sort of floating there. It was staring into the pub. It had a kind of pleading look, and it was so white, white as an aspirin. It was staring right at me. Thinking about it over the years, I realize it was probably the landlord’s boy, or some kid off one of the local farm. But as far as I was concerned then, I was convinced, I just *knew* that I was looking at my own child. If you like, I was looking at you.’<sup>8</sup>

クレアはこのとき、生まれてくるスティーヴンの顔を見ていたのである。つまり、時を超えて「未来」を見ていたことになる。そしてその子は「訴えかけるような眼差し」をしていた。このときクレアは子供を生む決心をする。父親が自転車のことを語りたがらない理由がわかるのである。前述した引用を考え合わせると、時を超えて母親とその子供が相対していることになる。マキューアンはこのように時に「捻り」を加えて幻想的な雰囲気を漂わせている。『時のなかの子供』は、写実的な描写が多く現実的な小説ではあるが、微妙に時が崩れていて、時には読者はそれが現実なのか幻想なのか迷う。しかし、たぶんそれはマキューアンが最初から意図した効果なのであろう。『時のなかの子供』の「時」は絶えず変化するもの、そして「時のなかの子供」は移ろいやすく脆いものを象徴している。ケートは成長しているはずだが生きていくかどうかかわからない、チャールズは時とともに脆い子供へと退化し、最後には母親に叱られた子供がその腹いせに自殺するように死んでいく。スティーヴンは胎児の自分が中絶されそうになっているシーンを目撃する。しかし、彼はその不思議な体験のあとジュリーと愛し合い、彼女のお腹の中には新しい生命が宿る。ジュリーも中絶を考えるが、最後にはスティーヴンがその子を取り上げる。いつの時代も「子供」は脆く弱いものであるというのがマキューアンの認識であり、そういった脆く弱い存在を守るのが大人の責任であるということを彼は『時のなかの子供』で伝えたかったに違いない。マキューアンがそういった、今までとは違った、一筋の希望が感じられるメッセージを小説の中に残そうと思ったのは、彼自身に子供が生まれようとしていたことと偶然ではない。

#### 4. サッチャー首相について

今まで見てきたように、『時のなかの子供』の社会は暗く、その仲の「子供」は弱く脆い存在であった。小説の中に「首相」が登場するが、それはサッチャー女史を髣髴とさせる。マキューアンは *A Move Abroad* (1983) の中でサッチャー首相の政策でイギリス社会が実際次のように変わったと述べている。

In a very short time, Great Britain began to feel like a quite different place as this new spirit took hold. Money-obsessed, aggressively competitive and individualistic, contemptuous of the weak, vindictive towards the poor, favouring the old American opposition of private affluence and public squalor, and individual gain against communal solutions, indifferent to the environment, deeply philistine, enamoured of policemen, soldiers and weapons — virile times indeed. And interesting times too. I was fascinated by the changes. I could not believe that this transformation could be entirely work of Mrs Thatcher and her government.<sup>9</sup>

経済の建て直しのために、利潤をやみくもに追求するあまり、人々は貧しい人をさげすみ、環境に無関心になり、警官と軍人を信用するようになったと述べている。『時のなかの子供』の社会はこれと酷似している。「許可証を持った乞食たち」がいたところで現れ、通行人を集団で取り囲んでからかい、施しを強要する。彼らは明らかに一般の人々から忌み嫌われている。政府は乞食たちの救済に本気で取り組んでいない。彼らの救済を国民の慈悲に任せきっている。他人の悲しみを見て見ないふりが出来ない人々は、おかしいと感じながらも施しをしてしまう。公共の場で施しを受ける権利を導入した政府のやり方を、スティーヴンは「悪い政府の小賢しさ」と非難している。<sup>10</sup> さらに、小説の世界は秩序が乱れ核戦争の危機に直面している。武装した警官が目立ち、首相はど

こに出かけるにもホットラインを持ち歩いている。ステイーヴンは「今や政府の責任は簡単な言葉で定義されるようになった。秩序を保つこと、そして国を敵から守ることである」と述べている。<sup>11</sup>

「首相」は小説の中で二回登場する。しかし、サッチャー (Thatcher) という固有名詞は一切出てこない。首相の性別も明らかにされていない。批評家の多くはサッチャー首相と理解しているが、あくまでも架空の人物と中立の立場を取る批評家もある。マキューアンがサッチャー女史の名前を出さず、それに似た人物として描写しているのは、勿論名誉毀損という問題もあるが、彼自身読者をあれこれ想像させて楽しませることによって自分も楽しんでいるふしがある。ステイーヴンが最初に首相に出会うのは、例の小委員会においてである。首相の性別に関して人称代名詞を使っているのではない慣習ができていた。首相が男性であれば、こういうことをわざわざ書く必要はまずない。彼の前に立った首相は以下のように描写されている。

But the figure standing before him now, unlit by studio lights, unframed by a television set, was neither institution nor legend, and bore little resemblance to the caricatures of political cartoonists. Even the nose was much like any other. This was a neat, stooped, sixty-five-year-old with a collapsing face and filmy stare, a courteous rather than an authoritative presence, disconcertingly vulnerable.<sup>12</sup>

首相は「鉄の女」のイメージからは程遠く、ただの腰の曲がった 65 歳の老女であった。サッチャー首相が生まれたのは 1925 年であるから、小説の舞台は 1990 年ということになる。近未来のイギリスを描いているから、おおむね数字的には合うことになる。さらに「小さな手の指には結婚指輪がはめてある」という描写があるので、男性の首相とは考えにくい。ステイーヴンはそのあと首相から個人的に会いたいことを告げられ、彼らは廊下で付き添いの人たちの耳を避けて立ち話をするようになる。話題はチャールズのことであった。首相は彼の親友ということでステイーヴンを信用し、チャールズを愛していることを告白する。そしてノイローゼに罹ったことしか知らない首相は、彼の安否をステイーヴンに尋ねる。個人的にチャールズに会うことが躊躇われる首相はステイーヴンに、詳しい消息が分かったら知らせてくれるように頼むのである。

数ヶ月がたち、なかなかチャールズのことを報告しないステイーヴンを首相は昼食会に招待する。しかし、すでに述べたように途中で娘のケートに似た少女を目撃したので行くことができなかった。首相は再度人を使って彼を昼食会に招待するが、ステイーヴンは次のように言ってこれを断るのである。

'In the second, and nothing personal in this, I resent what the Prime Minister's doing in this country all these years. It's a mess, a disgrace.'

'Then why did you accept first time?'

'I was a mess too. Depressed. Now I'm not.'<sup>13</sup>

ステイーヴンは、はっきりと首相がこの国のためにしてきたことが「クズ」であり「恥ずべきもの」であると言い切ってしまう。昼食会に最初行くことを承諾したのは自分も気落ちした「クズ」だったからである。しかし、彼はもう立ち直ったのではっきりと行くことを拒否する。ステイーヴンはケートを失い、ジュリーに去られた寂しさと悲しさで腑抜けた人間になり、毎日独りでウィスキーを飲みながらテレビを見ていた。そんな無意味な生活に別れを告げて新しい生活を始めるためには、

正しくないと自分が思うことははっきりと正しくないと切り切ることで彼は考えたのである。昼食会の招待を断ったスティーヴンは、自分の住所は知っているはずだから会いたければ首相のほうから出向くように告げる。驚いたことに首相は本当に彼のフラットを訪れる。護衛に守られて、ホットラインの電話を居間に備え付け、いつの間にか彼の書斎に座っていた。首相はチャールズとのことを再度話し始める。

‘When I initiated the Childcare Project I made sure Charles had responsibility for some of the subcommittees. That gave us the opportunity to meet confidentially every now and then. He was full of ideas and I looked forward to these meetings. I began to call them a little more often than was necessary. You might think it extraordinary and perverse that I should form an attachment to a young man...’

‘Oh no,’ Stephen said, ‘not at all. But he is someone’s husband. And you are the upholder of family values.’<sup>14</sup>

首相はチャールズを児童擁護委員会の長に据えて、機会があれば彼と必要以上に会っていた。自分の息子のように年の離れている若い男を首相が愛していたことが明らかになる。首相は諜報機関を使って彼の行動を調べさせ、その日の行動を夜ベッドの中で読むのである。異常な愛着であることが読者に伝わってくる。首相の「性別」が小説の中で明らかにされていないので、首相の愛情が母親的なものか父親的なものか、異性愛的なものかホモセクシュアル的なものか区別がつかないとジャック・スレイは彼の著書の中で論じ、「マキューアンは小説の中で巧みに政治的ゲームを楽しんでいる」と述べている。<sup>15</sup>

首相が力を入れてチャールズをその委員長にした児童養護委員会は秘密裏に子供を育てるガイドブックを作成していた。小説の各章はその抜粋から始まっている。たとえば「日々の子供の世話に父親が関わると、威厳のある人物でなくなってくる」というような一節がある。まことしやかに奇異で滑稽な説が並べられている。これは首相が率先して行う児童教育のガイドラインになるべくチャールズ自身が作成したものだった。首相を喜ばせるために時には自説を翻して彼が秘密裏に作成を進めていた。このハンドブックはスティーヴンたちが出席している委員会が作成することになっていたが、もうすでに内容が出来上がっていて、そのコピーを偶然手に入れた委員がスティーヴンのところに持ってくる。コピーはマスコミに流れ、有識者はその内容に激怒し、野党の党首は議会でそのガイドブックの存在に関して首相に問いただした。首相はその本の存在に関して一切知らないし関わっていないと明言した。巷はこの問題で騒然となり、野党の党首は議会でさらに追及しようとした矢先、首相はそのガイドブックを数千部コピーして関係先に配布し、自分は知らなかったが、内務大臣は知っていたという遺憾の意味のコメントを発表した。首相のこのようなすばやい対応は、フォークランド紛争（1982）でサッチャー首相が国際法を盾に各列強国を味方につけて事態の解決を図ったことと似ている。スエズ動乱（1956）当時のイーデン首相はイスラエルとの間に謀議はなかったと議会で嘘の発言をして後に退陣を余儀なくされたが、小説でも「首相」はガイドブックの件で「嘘」をついていたことになる。

首相は「国家の親」として児童教育に力を注いでいた。未来に向けて健全な子供の教育を目指していたわけである。その首相が自分の「子供」みたいに年齢の離れたチャールズに異常な愛着を示し、結果的に死に追いやったことを考えると、果たして首相は本当に子供の未来を考えているのだろうかと疑問になってくる。スティーヴンが「チャールズには妻がいます」と言ったとき、首相は



「でも夫婦には子供がいらないから」と答える。子供がいらないから、チャールズを奪っても構わないという意味であるが、この国の将来を担う子供たちの健全な育成を考える人の言葉とはどう考えても思えない。

## 5. 二人の労働者

スティーヴンは小説の中で二人の労働者に出会う。サッチャー首相が国の政治を司る「上」の人であるとすれば、彼らはいわばその政権下の社会の「下」で働く人々である。一人はタンク・ローリーの運転手であり、もう一人は貨物機関車の運転手である。前者のエピソードは「明るさ」を持って描かれ、後者は「静かな情緒」で描かれ、物語全体の暗い雰囲気とは別世界のような感覚を与える。彼らの人となりは首相のそれとはかなり対照的である。

タンク・ローリーの運転手とはレンタ・カーを借りてサフォークに住むチャールズの見舞いに行く途中出会う。ロンドンを出て田舎道になり、スティーヴンの車はトラックの後ろに付く。突然トラックの後尾から火花が散り、車体の後部は前に大きく傾き宙返りをして道路に叩きつけられた。急ブレーキを踏んだスティーヴンの車はトラックとガードレールのわずかな隙間に入り込み、車の横を破損しただけで彼に怪我はなかった。トラックの運転手はさかさまになった運転台の下に挟まれて、意識はあるが首から下の部分が車体の下敷きになって動かすことはできない。出血しているかもしれないし、あたりにはガソリンがこぼれていた。スティーヴンは何とか彼を車体から引き出そうとするが、トラックの運転手は「もう俺はだめだ。お願いだから、遺言を頼まれてくれないか」と言う。スティーヴンは「最後の言葉」と言われれば、いやと言えない。手帳と鉛筆をポケットから取り出す。運転手の遺言は、妻のジェーンに宛てたもので、「君を昨夜夢で見た。こういうことにいつかはなと思っていた。子供たちによろしく」というものだった。次は友達のピート宛で「俺が最初にやってしまった。土曜のスヌーカーには出られない。そうだ、この文章の終わりには“!”を二つ三つ付けてくれ。100ポンドの借りがあるな。ジェーンからもらってくれ」と言って一呼吸おいた。彼は道路の表面を眺めていた。スティーヴンは手帳のページをめくり、相手が話し始めるのを待った。

At last he said dreamily, 'This one's for Mr Corner, care of Stockwell Manor School, South West Nine. Dear Mr Corner, I don't suppose you'll remember me. I left about fourteen years ago. You chucked me out of your class and said I'd never do nothing. Well I got my own business now, with my own lorry that's almost paid off, a pink twenty-ton Fahrschnell. I often think about what you said, and I wanted you to know. Yours faithfully, Joseph Fergusson, aged twenty-eight. The next one's to Wendy McGuire, Thirteen, Fox's Road, Ipswich. Sweetheart...'

Stephen snapped the notebook shut and stood. 'That's it,'...<sup>16</sup>

出血しているかもしれないし、あたりに充満しているガソリンにいつ火がつくとも知れないのに、最後の言葉だからと言っておとなしくメモを取ってやっていれば、奥さんや子供に宛てるぐらいなら分かるが、友人とスヌーカーが出来ないとか借金のことだとか、おまけに追い出された学校の教師に期待にそむいて悪いがうまくやっているとか、最後には恋人に宛てて遺言を送るとは。スティーヴンが怒るのも無理はない。この箇所は手を叩いて笑いたくなるほど面白い。まるで『アムステルダム』を髣髴とさせるようなユーモアである。小説全体の暗さとはかなり異質な「明るさ」

である。

スティーヴンは自分の車に戻ってトランクからジャッキを取り出し、逆さになった運転台の底にあてがう。少しずつ持ち上げて、運転手の首から下の部分を徐々に引き出していく。このイメージは、お産で赤ん坊を母体から引き出す行為を連想させる。これは複数の批評家が指摘していることである。さらにこのイメージは具体的に小説の最後でスティーヴンがジュリーから赤ん坊を取り上げる行為へと重なっていく。つまり、スティーヴンがトラックの運転手を助ける行為はこれから生まれてくる子供たちを助ける行為を象徴していると言える。

奇跡的に、運転手は手首を骨折しただけだった。彼らはスティーヴンの車に乗り、積んであったシャンペンを飲みだす。一瓶が空になるまで彼らは何も話さなかった。ようやく運転手は口を開き、「スティーヴン、お前は最高だよ。まったく最高だ。ジャッキのことは俺には思いつかなかった」と言った。彼らは饒舌になり、生きていることを互いに祝福した。二本目のシャンペンに取り掛かるころには、彼らは大いに意気投合し大きな声で歌い始めていた。小説の中でスティーヴンがこのような暖かな人間の触れ合いをしたことはない。トラックの運転手ジョーを警察署の前で降ろしたとき、スティーヴンが「今君は生きている。生きていることは今までと何か違いがあるのかい」と聞くと、ジョーは次のように答える。

Joe had been thinking, he had his answers ready. 'It means I'm going back to Jane and the kids and bugger Wendy Mcguire. It means I'll buy two second-hand rigs with insurance money.' <sup>17</sup>

スティーヴンは警察署に入るジョーの背中を見送りながら、ポケットに入っていた彼の遺言を排水溝に捨てる。スティーヴンはジョーから、結局人間は生きていかなければならないこと、辛くても家族と子供を守っていかなければならないことを学ぶのである。

スティーヴンは二人目の労働者と物語の最後に出会う。チャールズの遺体をセルマの家に運んだ後、ジュリーから電話があって急いで彼女のところに行くことになる。ロンドンに着いたスティーヴンはヴィクトリア駅にタクシーで向かうが、駅に着いても真夜中なので、ドーヴァーに行く電車はない。駅で働く少年から保線工事の機関車なら今出るところだと知らされ、その運転手に乗せてくれないかと頼みに行く。

Instead he rested his hand on it and said, 'I wondered if you could drop me off somewhere on the way to Dover.' As he spoke he reached into his back pocket and brought out the fifty-pound notes. 'I know it's strictly against the rules, so...'

He had extended his hand with the money. The driver sat down, put his elbow on the control panel and propped his cheek against his knuckles. He looked past the money at Stephen's face. 'You on the run or something?'

Because he had not expected to explain himself, Stephen could think only of the truth. 'I've had an urgent summons from my wife, my ex-wife.' He sat down, feeling that earned the right. 'When did you last see her then?' The driver stressed the pronoun, as if he knew the woman in question.

'Last June.'

The man grimaced and said, 'That figures.' <sup>18</sup>

無断で人を乗せれば運転手は職を失うことになる。警察から追われている人間かもしれない。あえてスティーヴンの言葉を信じたのは、小説の最初でスティーヴンが自ら語った「国民の心の奥そこにある何が正しいのかを見抜く直感」を運転手が持っていたからであろう。しかし、スティーヴンはお金で片が付くと思っていた。そういう人間に彼は成り下がっていたのである。運転手は、スティーヴンが握っている紙幣には目もくれず。それ以上何も聞かずに彼を適当なところで降ろしてくれる約束をしてくれた。お金を受け取らない運転手にスティーヴンは彼の名前だけでも告げた。運転手の名前はエドワードで、彼は機関車を走らせながら、丘の上に立つきれいな城を指差す。その丘が政府の政策で売りに出され、城がなくなることを嘆く。

'It's irrational,' Stephen said.

Edward shook his head. 'It's too rational, my friend. That's the problem. Here's a cathedral in the dark. What's the point of that? Close it down. Build a motorway. But there's no heart in motorways. You won't see kids on the bridges taking car numbers, will you.'<sup>19</sup>

政府の政策で美しい田園に立つ城がなくなっていく。「鉄道」をサッチャー首相が嫌っていることは周知の事実であり、鉄道の代わりに大きな高速道路を建てようとするのはまさに合理性を追求した結果であろう。しかし、その結果は田園から美しい城がなくなることであり、遊び場所がなくなった子供たちは橋の上から車のナンバー・プレートに数字を当てて遊ぶようになる。エドワードはそういう環境の変化を憂いでいる。

スティーヴンとエドワードを乗せた機関車は夜のしじまの中を駆け抜けて行く。いつしか雪も止み、星空のもと彼らは暗闇の中を静かに進んで行く。このようなしんとした状況の中でスティーヴンは再び暖かな人間的触れ合いを体験するのである。彼はこの後妻のジュリーから赤ん坊を取り上げる。エドワードの機関車に乗せてもらわなければお産には間に合わなかった。つまり、このエピソードも子供を大切にしなければならぬというメッセージを含んだものである。

## 6. おわりに

マキューアンは *A Move Abroad* の中で『時間のなかの子供』を書くようになったいきさつを以下のように説明している。

In the summer of 1983, two months after *The Ploughman's Lunch* had been released, I found myself tilting my chair and daydreaming about a novel I might write. I began to make notes. I was about to become a father, ...There is a pub just along the road. A figure who is me and not me is walking towards it, certain that he is about to witness something of overwhelming importance. Writing *The Child in Time*, which took me to the end of 1986, was about the discovery of what that man saw. Other elements — a man pulled from the wreckage of a lorry, a birth, a lost child, a man who attempts to return to his childhood,...<sup>20</sup>

マキューアン自身に子供が生まれようとしているときに、『時間のなかの子供』の構想が練られていた。浮かんだイメージはある男が道端のパブに近づいて重要なことを目撃しようとする場面であ

る。このシーンを中心に物語は語られていくことになる。スティーヴンが娘を誘拐され、妻とも別れ、精神的に疲労し社会そして「時間」とのつながりも見失っていきながらも、最後には苦しみから這い上がって新しい生命とともに妻との愛情を取り戻す物語は、マキューアンが父親となる節目に、一筋の希望を与えるということでそれまで彼が書いてきた小説とは一画をなすものである。舞台は近未来のイギリスであるが、そこに登場する首相はサッチャー首相がモデルになっていることは間違いない。首相の政権下の社会は、外交、交通、福祉の問題で暗く、地球の温暖化、核戦争の危機がなおさら暗く覆っている。首相は「国の親」として児童擁護のガイドブックを編集するが、その責任者のチャールズを溺愛するあまりに彼を精神的に「子供」にしてしまい、最後には自殺に追い込んでしまう。スティーヴンは物語の中で二人の労働者に出会う。そのエピソードは明るく、凜として物語の暗い雰囲気とは別世界である。彼はその二人との人間的な出会いから、あらためて「子供の大切さ」を学ぶのである。まさしく、それがこの小説のテーマにもなっている。サッチャー首相の政策にマキューアンが批判的であったことは知られている。それは概して、細かな政策上の問題を除けば、生まれてくる子供たちにとって良い環境作りを行っていないということに要約されるのかもしれない。

#### [注]

1. *Understanding Ian McEwan*, p. 100.
2. *Venus Envy*, p. 20.
3. *The Child in Time*, p. 118.
4. *Ibid.*, p. 142.
5. *Ibid.*, p. 107.
6. *The Work of Ian McEwan*, 182.
7. *Ibid.*, p. 59.
8. *Ibid.*, p. 175.
9. *A Move Abroad*, p. xxiv.
10. *The Child in Time*, p. 8-9.
11. *Ibid.*, p. 28.
12. *Ibid.*, p. 83.
13. *Ibid.*, p. 154.
14. *Ibid.*, p. 188.
15. *Ian McEwan*, p. 127.
16. *The Child in Time*, p. 98.
17. *Ibid.*, p. 100.
18. *Ibid.*, p. 207-8.
19. *Ibid.*, p. 209.
20. *A Move Abroad*, p. xxv-xxvi.

#### [参考文献]

- Byrnes, C. *The Work of Ian McEwan : A Psychodynamic Approach*, Pauper's Press, 2002.  
 Malcolm, David. *Understanding Ian McEwan*, University of South Carolina Press, 2002.  
 Mars-Jones, Adam. *Venus Envy, Chatto Counter Blasts No. 14*, Chatto & Windus, 1990.  
 McEwan, Ian. *A Move Abroad*, Picador, 1983.  
 McEwan, Ian. *Amsterdam*, Jonathan Cape, 1997.

二人の労働者とサッチャー首相

McEwan, Ian. *First Love, Last Rites*, Vintage Books, 1972.

McEwan, Ian. *In Between the Sheets*, Vintage, 1997.

McEwan, Ian. *The Child in Time*, Vintage, 1987.

Ryan, Kiernan. *Ian McEwan*, Northcote House, 1994.

Slay, Jack, Jr. *Ian McEwan*, Twayne Publishers, 1996.